

# 日のみちを月またあゆむ朴の花

藤田湘子

これはひょつとして天動説ではないか。でも、とても共感できる。学校で地動説を習った記憶はあるが天文に弱い私は、未だにお天道様が動いていると思っっている。

朴の花が取り合わされているので、「朴下亭」の二階の書斎から眺めての定点観測の感慨であろうか。夜の窓辺で移り行く月を眺めているうちに、太陽と月と同じみちを毎日通り過ぎているのかと思う。月光に照らされた朴の花などあれば、直のこと、「時間」に思いを馳せる。

掲句は六十四歳の作だが、平成八年、七十歳で「第二次鷹」を発足した時、主要同人の作品発表欄を、日光集、月光集、と改称し、応募作品賞を星辰賞としたところからも、天体への思い入れの深さとロマンを感じる。

1990年(52作)第九句集『前夜』 鑑賞・野本京